



新入生にすすめる
50冊の本

2024

[表紙写真タイトル：桜色の光が舞う頃]

(福山大学「桜のフォトコンテスト」2023年度さくら賞受賞作品)

「満開の桜と雲一つない透き通った青空が、まさに桜色の光が空に舞っている様な美しい風景だと思った為、この写真を撮影しました。

撮影場所は、人があまり居ないひっそりとした所なので、お花見の穴場スポットだと思います。是非皆さんも満開の桜を見ながら散歩してみてはいかがでしょうか?」

表紙デザイン・写真提供：大咲 絵鈴奈

(生命工学部生命栄養科学科4年)

読書への誘い

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。本学に入学されましたことを心からお慶び申し上げます。大学での学修は、通常の対面型授業に加え、学修支援システム「セレッソ」を活用したオンデマンド型学修など、多様な方式で学修が行われています。図書館は、来館利用に加え、ネット空間を含む図書館外での利用にも注力するなど、皆さんの「読書」を支援しています。

「新入生にすすめる 50 冊の本」は本学の教職員と学生がおすすめの本を紹介したものです。おすすめ(書評)を“人生の道しるべ”、“学びの道しるべ”、“科学の道しるべ”、“文学の道しるべ”、“こころの道しるべ”の 5 つに分類して、皆さんの興味関心に合う本に出会えるよう工夫しています。多くの言葉に触れ、多様な分野について考え、知識を身に付ける等、「読書」は大学生活を充実させるものです。読みたい本を見つけ、それを読むために、図書館を利用してください。

「新入生にすすめる 50 冊の本」の刊行は2012年度に開始され、2024年度で13回目の発行となります。過去の「新入生にすすめる 50 冊の本」は福山大学附属図書館ホームページで閲覧できます。累計で数百冊の本を新入生の皆さんにおすすめしています。これらの書評を読んで「自分の読書」に最適な本を見つけ、図書館へと足を運んでみてはいかがでしょうか。

福山大学附属図書館
館長 田中 始男



人生の道しるべ

- | | |
|---|--------------|
| 忘却による思考の整理 『思考の整理学』 外山滋比古 著 | 石原春河 ………1 |
| 災害について考えるヒント 『天災と国防』 寺田寅彦 著 | 大高弘士 ………2 |
| 「知の巨人」と称されるが、「探求の人」と呼びたい！ 『いつか必ず死ぬのになぜ君は生きるのか』 立花隆 著 | 木村純壮 ………3 |
| 3秒で体がわかる、人生が変わる 『あなたは、うで体？あし体？』 鴻江寿治 著 | 蔵田 修 ………4 |
| 読んでみなはれ 『本田宗一郎』 伊丹敬之 著 | 白木康晴 ………5 |
| 学生生活で会う人の心を動かし、豊かな人生を送るために 『頭のいい人が話す前に考えていること』 安達裕哉 著 | 鈴木省三 ………6 |
| 令和の今こそ江戸っ子の食生活に学べ？ 『江戸っ子の食養生』 車浮代 著 | 高原有美 ………7 |

- 山に魅了され、世界を駆け回った冒険家
『青春を山に賭けて』 植村直己 著
竹口岩根
……8
- これからの AI 時代、「ネコ転」は成功の秘策かも
『「ネコ型」人間の時代』 太田肇 著
田中哲郎
……9
- とてつもない別れ方
『史上最悪の破局を迎えた 13 の恋の物語』 ジェニファー・ライト 著
中島悠一郎
……10
- 「混乱の中、ある声が残りました」
『アンネの日記』 アンネ・フランク 著
西庄瑞稀
……11
- もがき、愛し、めくる
『頁をめくる音で息をする』 藤井基二 著
村上 凜
……12



学びの道しるべ

- “人の役に立つ”って、本当に大事なことですか？
『役に立たない』研究の未来』 初田哲男, 大隅良典, 隠岐さや香 著
泉 貴人
……13
- 美術の解説書ではなく「物語」があります
『美術の物語』 エルンスト・H・ゴンブリッチ 著
大谷恭子
……14

| | |
|--|--------------|
| 大学での論文執筆にまつわる裏表 『ぎりぎり合格への論文マニュアル』 山内志朗著 | 大塚 豊 ……15 |
| 「分からないから芸術なのだ」というお手上げ状態に、 光を灯す一冊 『いちばんやさしい美術鑑賞』 青い日記帳著 | 小川知華 ……16 |
| キャンパス内の大自然、草木や花も友に 『原色牧野植物大圖鑑』 牧野富太郎著 | 佐藤理恵 ……17 |
| GDPが増大することは、 本当に人々の幸福を増大させるのでしょうか？ 『GDP』 ダイアン・コイル著 | 高山和夫 ……18 |
| 著作権法と文化的・社会的価値創造の狭間に 『国破れて著作権法あり』 城所岩生著 | 田中始男 ……19 |
| 厳しい社会での人の生き方に繋がる、この一生懸命さ。 『昆虫学者はやめられない』 小松貴著 | 寺尾信吾 ……20 |
| オートファジーを丁寧に解説し、 ノーベル賞受賞の大隅良典さんとの思い出を回想した本 『生命を守るしくみオートファジー』 吉森保著 | 早川達二 ……21 |
| 社会科学的見地から見るプロ野球 『プロ野球「熱狂」のメカニズム』 水野誠, 稲水伸行, 笹原和俊編 | 原口博行 ……22 |

読書のみは無意味？！アウトプットの薦め 松本陵磨
『学びを結果に変えるアウトプット大全』 樺沢紫苑著 ……23

歴史をながめる際の「先入観」にご注意！ 村上 亮
『検証ナチスは「良いこと」もしたのか？』 小野寺拓也, 田野大輔著 ……24

**社会と建築の間から、
私たちのこの先の未来をどう読むか** 山本一貴
『閉ざされる建築、開かれる空間』 中川理著 ……25



科学の道しるべ

タネから楽しく人生を学べるか。 井上敦子
『スイカのタネはなぜ散らばっているのか』 稲垣栄洋著 ……26

AI時代に過去の未来社会予測を振り返ってみよう 伍賀正典
『ロボットの時代』 アイザック・アシモフ著 ……27

「生命とはなにか」の命題に迫る 佐藤雄己
『生物と無生物のあいだ』 福岡伸一著 ……28

脳にとって「良い習慣」と「悪い習慣」 高橋佳美
『脳に悪い7つの習慣』 林成之著 ……29

日頃感じている睡眠の疑問解決できます
『やっではいけない眠り方』 三島和夫著
牧 香苗
……30

動脈硬化の予防に用いられるスタチン。
その発見と承認までの道のりを発見者自らが語る。
『新薬スタチンの発見』 遠藤章著
松岡浩史
……31

お茶とは何かから始まり、お茶の歴史と作り方や
お茶と健康の関係まで、お茶について詳しくなれる本
『お茶の科学』 大森正司著
森 祐斗
……32

味の言語化、できていますか？
『豊かな人生を引き寄せる「あ、これ美味しい！」の言い換え力』
福島宙輝著
山野佳那
……33

眠れなくなるほど面白い！
『面白くて眠れなくなる脳科学』 毛内拓著
吉津悠子
……34



文学の道しるべ

苦悩の人生を生きたある男の手記
『人間失格』 太宰治著
碓本梢太
……35

- 唯一無二のミステリー 大無田康太
『屍人荘の殺人』 今村昌弘 著 ……36
- 日常に潜む不思議な縁で結ばれ重なり合う遠くて近い5人の人生 加藤彩羽
『ノウイトオール』 森バジル 著 ……37
- いいロボットとは 小池綾香
『きまぐれロボット』 星新一 著 ……38
- 小さな町工場が窮地を救う 児玉侑斗
『下町ロケット ゴースト』 池井戸潤 著 ……39
- From Baker Street in London 是友香澄
『シャーロック・ホームズの冒険』 アーサー・コナン・ドイル 著 ……40
- 「あの人がみたいに本を守りたい」 西江知菜
『図書館戦争』 有川浩 著 ……41
- 海賊の世界を少しのぞき見してみよう。 野島 萌
『村上海賊の娘』 和田竜 著 ……42
- 就職活動×ミステリー 原田稀史
『六人の嘘つきな大学生』 浅倉秋成 著 ……43
- 古典文学の新しい楽しみ方 村上りの
『ハイド』 ダニエル・ルヴィーン 著 ……44

見落としには御用心
『きのうの影踏み』 辻村深月 著
吉梅彩音
……45

「生きてる」と「生きてく」、その間にあったもの
『護られなかった者たちへ』 中山七里 著
四茂野尚也
……46



こころの道しるべ

少し古いですが今に通じる人の成長・家族のお話
『稚くて愛を知らず』 石川達三 著
石井香代子
……47

ホームспанとひつじ
『雲を紡ぐ』 伊吹有喜 著
大沢 凜
……48

「作家で詩人で画家で、エルロンドが合わさった人」
『J・J・R・トールキン』 キャサリン・マキルウェイン 著
喜多村侑佳
……49

あなたがいま何かを選んだ時、速い思考（ファスト）と
遅い思考（スロー）のどちらを使っていましたか？
『ファスト&スロー』 ダニエル・カーネマン 著
助田 暁
……50

その悩みにお応えします！！
『自省録』 マルクス・アウレーリウス 著
中島 学
……51



忘却による思考の整理

『思考の整理学』

外山滋比古 著（ちくま文庫）

忘れるために忘れようと考えたと、かえって忘れられなくなったりすることはありませんか。本書では思考の整理について様々な方法を上げています。

これまで知識をたくさん増やしたい時、学校ではただ勉強をする事を教えられました。学校教育は型に囚われ自発性に欠ける「グライダー人間」を生み出す性質を持つ、本書ではそのように言っています。思考を整理するという事は、実は知識を備える事と真逆の忘却を覚えなければならないのです。その方法は日常に溢れており、例えば、学校の時間割もそうだったりします。国語をやったら、休憩を挟んで数学を学び、また休憩を挟んで体育をする。これは一見、普通のことですが忘却のための重要なポイントをおさえているのです。

なぜそれが大切なのか、そもそも思考を整理するという事はどういうことなのか、一度この本を読んでみるとあなたの日常が変わり始めるのかもしれない。

石原 春河（生命栄養科学科4年）



災害について考えるヒント

『天災と国防』

寺田寅彦 著（講談社学術文庫）

物理学者の寺田寅彦（1878～1935）が残した随筆から災害に関連するものを集めたもので、科学者が書いたエッセイとしては芸術的で科学と文学が調和した作品です。

文理融合が必要と言われていますが、寺田は物理学と哲学を融合せよと言っているのではなく、哲学のものの考え方を物理学の研究に適用すべきと主張しています。

また、1923年の関東大震災の体験から「災害を大きくするように努力しているものはたれあろう文明人そのものなのである」と警告しています。まさに現代社会の問題点を予言したもので、内容がまったく古びていません。このたびの能登半島地震について考えるうえでも、たいへん参考となる書物です。

大高 弘士（職員）



「知の巨人」と称されるが、「探求の人」と呼びたい！

『いつか必ず死ぬのになぜ君は生きるのか』

立花 隆 著 (SB 新書)

著者、立花隆氏はよく「知の巨人」と称されます。しかしながら、個人的には「探求の人」と呼びたい。なぜなら、彼は知識が豊かで詳しいだけではなく、新しい知識を獲得し、独自に奥深く働きかけ分析し、創造的に評価して行く探求プロセスにこそ彼の本質的な特徴があると考えからです。このプロセスは、科学技術の研究開発アプローチと共通しているようで、これらに携わる一人として共感を覚えるところです。

本書は、立花隆氏の多数の著書・知識のサマリーとなっていて、読者への強いメッセージが込められ、次のように提言していると思います。「人間は知る人、理性の人であり、自由な思考により新しいものをつくりだすことができ、ものの見方、考え方、感じ方等多様性が大切で、ケア・テイカー(世話役)、責任行動者にならなければならない。また、自分の問い、何ものかを求めんとする意志を持ち、問い続け、やりたいことをやりたいようにするのが良い。」知を極めようとする考え、行動力に頭が下がります。自分も、彼のように学ぶ気持ちと姿勢を絶やさないようにしたいと思います。

木村 純壮 (機械システム工学科)



3秒で体がわかる、人生が変わる

『あなたは、うで体？あし体？』

3秒で体がわかる、人生が変わる』

鴻江寿治 著（集英社）

プロ野球選手をはじめとするトップアスリートの幅広い支持を集めるカリスマトレーナーの鴻江寿治氏から生まれた「骨幹理論」。人間には、体形、性別、利き手や血液型、運動能力が高いか低いかなど、様々な異なった特徴があると思います。そして、数多くのアスリートを見てきた鴻江氏が「うで体＝猫背型」か「あし体＝反り腰型」という大きな違いがあることに気がつきました。私はこの本を読んで、体の仕組みを知ることができて、運動パフォーマンスが上がったと実感しています。それぞれに合わせた運動、衣服、家具、寝具選びをすることで肩こりや腰痛など体の不調を軽減できることも分かりました。

まずは、自分が「うで体」なのか、「あし体」なのかを知り、体の特徴に合わせて生活、運動をすることから始めてみて、自分自身が持っている力を100%出してみてください。そして、大学生活をおくる中でこの本を読み、健康を維持して目標に向かって頑張ってください。

蔵田 修（職員）



読んでみなはれ

『本田宗一郎 やってみもせんで、何がわかる』

伊丹敬之著（ミネルヴァ書房）

本田宗一郎は、本田技研工業株式会社の創立者で技術者です。既成概念や常識にとらわれず、自由に考え、大きな夢を描いてまずやってみる「やってみもせんで、何がわかる」という言葉は、宗一郎が常に語り、実践した、ホンダ DNA の根底に流れる言葉のようです。

同じような言葉として有名なのは、サントリーの創業者である鳥井信治郎の「やってみなはれ、やらなわからん」という言葉です。こちらは、いわば、サントリーDNA ともいえる言葉でしょうか。

ただ、現実には失敗することの方が多いでしょうが、大企業を作り上げた二人が同じようなことを言っている以上、何らかの真理があるのではと思います。

白木 康晴（税務会計学科）



学生生活で出会う人の心を動かし、
豊かな人生を送るために

『頭のいい人が話す前に考えていること』
安達裕哉 著（ダイヤモンド社）

本書は、理系研究職の道からコンサルティング業界へと転身し、第一線で活躍してこられた安達裕哉氏が、自身の知見を基に、ビジネスやプライベートなシーンで他者から信頼を得て、物事を上手く進めるための指針をまとめたものです。

第一部では、その人自身に「社会的知性」をもたらし、他者からの「信頼」を得るための7つの法則が書かれています。第二部では、スポーツで言う「フォーム改善」として具体的な5つの思考法が紹介されています。本書を読めば、他者の心を動かせる「頭のいい人」が話す前に考えていることを学べます。特に、人の話を正確に聞いた上で、自分の言葉で言語化して会話することの大切さに気づかされます。

新入生の皆さんが、これから始まる学生生活で出会う方たちの心を動かし、豊かな人生を送っていただくために、本書を一読することをお勧めいたします。

鈴木 省三（理事長）



令和の今こそ江戸っ子の食生活に学べ？

『江戸っ子の食養生』 車浮代 著（ワニブックス）

「江戸の食生活」と聞くと、テレビの中の時代劇で見る「昔の話」と思う人がほとんどだと思います。

現代を生きる私たちは、和食・洋食・中華、その他「世界中の美味しいもの」を、遠い外国まで行くことなく、日本に居ながらにして気軽に味わうことができます。

しかし、江戸時代の人々は、旬の食べ物を、旬の時期に、その時に必要なだけ購入し、無駄なく食べきるという、実に健康的で美味しい上に安上がりな生活を送っていました。とれたての食材を天秤棒を担いで売り歩く棒手振ら行商人達から手に入れ、味噌、醤油、酢、酒で調理された旬の食材を、ごはんと一緒に毎日美味しく食べ、自然に免疫力も体力もアップする食生活だったのです。

レシピも多数掲載されているので、読んだ後に実際に作って・食べて「食養生」してみるのもおすすめです。

高原 有美（職員）



山に魅了され、世界を駆け回った冒険家

『青春を山に賭けて』 植村直己著（文藝春秋）

この本は日本人として初めて世界最高峰のエベレストに登頂した植村直己さんが書かれました。植村さんは大学に入学し、軽い気持ちで登山部に入部しました。そこから徐々に山に夢中になっていきます。大学卒業後は100ドルだけ持ってアメリカに渡り、世界を駆け回ります。世界で初めて五大陸最高峰に登頂し、南米のアマゾン川をイカダで下るなど破天荒な人です。

達成したことだけを見ると超人のように見えますが、この本を読み進めていくと植村さんの人柄が見えてきます。私自身もこの本を読み、夏休みにバイクで北海道を一周しました。

大学生になった今、何か新しいことを始めてみてはいかがでしょうか。今後の人生を変えるものに出会えるかもしれません。

竹口 岩根（海洋生物科学科4年）



これからのAI時代、「ネコ転」は成功の秘策かも

『「ネコ型」人間の時代』

太田肇著（平凡社新書）

自由気ままに行動するタイプのヒトを「ネコ型」人間と称するようです。ネコは拘束されることを極度に嫌い、対等な関係？を好むようです。ネコ達のような関係をめざせば、より風通しの良い人間関係を構築できるのかもしれない。

作者はネコ型に転じることを「ネコ転」と称し、ネコ転による新しい時代の到来を想起しています。直感的で遊び心満載のネコ型人間は、創造にも向いており、これからはネコ型の天下とも述べています。ネコ転で自由な発想を引き出し、組織を活性化し、夢を確信に変えます。欧米へのキャッチアップを求めてきた我が国では、個人や社会を問わず、より自由で創造的な活動が求められており、ひとつの方略としての「ネコ転」に興味がわきます。

人間をイヌ型やネコ型といったタイプに分類できるわけありませんが「ネコ転」をものの捉え方や人との接し方、あるいはマネジメントの方策のひとつとして、のぞいてみるのはいかがでしょうか。

田中 哲郎（薬学部）



とてつもない別れ方

『史上最悪の破局を迎えた 13 の恋の物語』

ジェニファー・ライト 著（原書房）

この本は「歴史上の人物はどんな破局を迎えたのか」という本です。13章あるためすべて紹介はできませんが一部がどんな内容なのか紹介します。

関係が悪化したあとにとんでもない悪行をした人物や、別れるためには手口も問わない人物、別れた後も詩を送ろうとする人物、夫婦を氷の宮殿に閉じ込めて拷問する女帝の話や、結婚はしているけれど、妻を幽霊として亡くなったことにしている話、別れた恋人に血まみれの手紙を送った人物等、いろいろな凄惨な別れ方を紹介している章があります。

すべては紹介できませんが、中にはとんでもないことをしていたり、過激な表現もあり、悲しい別れをしたりと、読むのに少し勇気がいる本でした。しかし、ある文に「恋愛が悲惨に終わってもオーケーだ。」と書かれており、「確かにそうだ」と感じたかもしれません。歴史上の人物がどんな別れ方をしたのか知りたい人は、読んでみてもよい一冊です。

中島 悠一朗（人間文化学科1年）



「混乱の中、ある声が残りました」

『アンネの日記』

アンネ・フランク 著（文春文庫）

これは、第二次世界大戦下、ユダヤ人少女・アンネが避難生活や戦争の残酷さを描いた日記である。

戦争が始まってから、ナチス・ドイツはユダヤ人を逮捕したり、虐殺していった。アンネの家族は“秘密の小屋”に隠れた。辛い生活でも、祭りや誕生日の時はみんな自分のものを持ち寄って、一緒にお祝いした。アンネは思春期で最も重要な二年をその中で過ごした。この作品の中で、私が一番好きなのは、アンネの戦争についての疑問を述べた所である。祭りの休日の「申し分のないお天気に、窓を閉めなくちゃならない」のはなぜか、「いったいわたしたちはなんのために、こんな長い、苦しい戦争を戦っているのか」これらの質問の答えが知りたい。しかし、誰も答えることはできない。私の中にはアンネの、その声だけが残った。世界の人々はアンネの作品によって戦争の残酷さを知った。この本は戯曲化され、舞台上で披露されて、世界に理解を拓げた。

花のような一人の少女の命は収容所で枯れた。でも、彼女の勇気、正義、楽観性、そして優しさは彼女の日記と一緒に人々の心の中に残された。

西庄 瑞稀（人間文化学科1年）



もがき、愛し、めくる

『頁をめくる音で息をする』

藤井基二 著（本の雑誌社）

これは、尾道の裏路地で古本屋「弐拾 dB(ニジュウデシベル)」を営む店主、藤井さんの随筆集である。「弐拾 dB」は、平日の深夜に街を優しく照らす。

祖母を亡くし、惚れた女と別れ、大好きだった本も読めなくなった。心酔した中原中也の卒業論文は書くことをやめ、内定先に辞退の電話をかける。逃げた先には古本屋があり、隠れた先には深夜があった。コロナ禍をもがき、不器用ながらも必死に生きる彼の生活の様子、尾道の街の人々やお店に来るお客さんとの関わりを交えながら、ありありと書いた日々の記録。木下夕爾、港野喜代子、伊藤茂次、『放浪記』の林芙美子、田代光枝、左川ちかななどの詩の一節を紹介しながら、丁寧に言葉が紡がれる。元医院であったというお店で、本の頁をめくる音とお客さんの言葉が静かに、だが騒がしい物語となっていく。

あなたの呼吸の音が、頁をめくる音となりますように。今日も番台では、藤井さんが優しく微笑んでいる。

村上 凜（人間文化学科1年）



“人の役に立つ”って、本当に大事なことですか？

『「役に立たない」研究の未来』

初田哲男, 大隅良典, 隠岐さや香著, 柴藤亮介ナビゲーター
(柏書房)

皆さん、以下の問いを考えてみるがいい。「ガンに効く薬を作っています」という研究者と「クラゲの新種を見つけています」という研究者のどっちが、人類にとって役に立っているだろうか？…ここで、躊躇なく「前者（薬）だ！」と答えた学生は、猛省してこの本を読むべきだ。

研究というものを、“役に立つ”という短絡的な見方で語ってきたからこそ、今の日本はおかしくなっている。本来、研究とは人類の興味・好奇心から発展してきたものであり、等しく価値があるべきだ！そんな“当たり前”のことを、3人の研究者が熱を込めて語る。侮るなかれ、著者はノーベル生理学・医学賞の大隅先生をはじめ、錚々たる面々だ。

冒頭の問題だって、ガンに効く薬は、新種のクラゲから抽出できるかも分かんぜ？この福山大学には、そんなクラゲの新種を見つけている、世界的に有名な研究者もいるんだぞ（笑）

泉 貴人（海洋生物科学科）



美術の解説書ではなく「物語」があります

『美術の物語』

エルンスト・H・ゴンブリッチ著（河出書房新社）

この本は、1950年の出版から、改版を経て、現在まで読み継がれている大ベストセラーです。

本書では美術の面白さを多くの人に伝えたいという著者の思いから、難しい言葉や、専門用語を用いず、自然に読みすすめられる言葉で綴られています。その時代の思想、科学の発展からどういった美術が生まれ、残っていったか。代表的な作品を図版として示しながら語られています。その作品は、紀元前 15,000 年の壁画から現代美術まで、彫刻、絵画にとどまらず、建築物といった芸術作品に及びます。

何となく惹かれていた、美術作品一つ一つに、実は繋がりがあり、自分の好みがわかってくるのが面白く、別の作品にも興味がわいてきます。

世界が広がる一冊になるのではないのでしょうか。

大谷 恭子（職員）



大学での論文執筆にまつわる裏表

『ぎりぎり合格への論文マニュアル』

山内志朗 著（平凡社新書）

大学に入り、これからいくつものレポートを書き、数年先には卒論等をまとめないといけない君に役立つかも知れない一冊。フォーマルで由緒正しい論文執筆の作法を解説した書物は少なからずありますが、それらとはひと味違うのが本書です。著者は二昔も前の出版時には新潟大学人文学部教授。自らの実体験を踏まえて、テーマの決め方をはじめ、大学生が出くわすであろう論文執筆時の悩みやエピソードがふんだんに盛り込まれています。

四苦八苦する問題についての対処法や「教訓」や「心得」が軽妙な語り口で述べられます。必ずしも「お行儀良い」とは言えない書きぶりも本書の魅力。大学教員が知られたくない裏話もコソッとちりばめられ、一方で、執筆時に決して忘れてはいけない数々のルールはしっかりと書き込まれています。

肩の凝らない本マニュアルで第一級の書き手が生まれますよう！生成 AI 等に頼りたくない「反骨精神」のある君に薦めたいものです。

大塚 豊（学長）



「分からないから芸術なのだ」というお手上げ状態に、
光を灯す一冊

『いちばんやさしい美術鑑賞』
青い日記帳 著（ちくま新書）

本作は、ブログ「青い日記帳」を主宰している著者曰く、「展覧会に出かけて作品をどのように見たらよいか」を解決する、「美術鑑賞超入門書」です。作中、モネについて取り上げた章の、「モネの作品には『抜け感』がある」という表現などが印象的です。馴染みのある言葉を「鑑賞のバロメーター」として用い、こちらに歩み寄ってくれます。「美術鑑賞は難しく考えると嫌になってしまう。できるだけ身近な例や興味のあるものを引き合いに出し、新しい『ものさし』で測りながら見て回れば楽しめる」というように、美術鑑賞の自由さを伝えつつ、道標にもなってくれているように感じます。

読んでいて置いていかれるような感覚がないことが本作の魅力です。作品の価値がわからないことも肯定し、そこからどう見れば良さが見えてくるのかを提示する構成は、初心者にとっても読みやすいものです。本作を美術館や博物館、展覧会に行く前に手に取ってみてはどうでしょうか。

小川 知華（メディア・映像学科2年）



キャンパス内の大自然、草木や花も友に

『原色牧野植物大圖鑑』

牧野富太郎著，本田正次編（北隆館）

パソコンで酷使した目を事務室の窓の外に向けると、学内の四季折々の花木、遠くに見える山の緑に目が癒されます。春はピンク色の桜、紅白色のツツジ、秋は黄色い花梨（かりん）が色づき始めます。そして、元気よく伸びる青々とした草花たち。本学は自然に溢れるキャンパスで、植物、自然との距離が近くて私は好きです。

学内コンクリート道の端っこから頑張って頭を出して、小さな花をつけている愛らしい草花を見つけ、名前を知りたくて携帯電話のカメラで写真をとりました。検索アプリですぐに調べる時短好きな方もいらっしゃるでしょうが・・・お勧めしたいのは、『原色牧野植物大圖鑑』。2023年のNHK連続テレビ小説「らんまん」の主人公となった植物学者、牧野富太郎博士（1862～1957）が作成した植物図鑑で、写真と見間違えるほど緻密で色彩豊かな絵が描かれ、植物の名前や特徴が書かれています。牧野博士は、多くの新種を発見し 1,500 種類を超える植物を命名しました。約 10 年をかけて最初の植物図鑑を完成させました。あの植物画に温かみを感じ、「雑草という名の草はない。」という牧野博士の植物への愛を感じずにはいられません。本学図書館にも所蔵されていますので、ぜひご覧ください！

佐藤 理恵（職員）



GDPが増大することは、
本当に人々の幸福を増大させるのでしょうか？

『GDP 「小さくて大きな数字」の歴史』
ダイアン・コイル著，高橋璃子訳（みすず書房）

皆さんはニュースで、GDP（国内総生産）という言葉を聞いたことはありますか？もしくは、今年の経済成長率は何パーセントになった、日本の景気は上向いている、といったことを聞いたことはあるでしょう。それらは全て、このGDPの数値が基になっています。GDPが増えると、景気が上向いているとみなされ、政治・経済的に望ましいと受け止められ、人々にとって幸福だと考えられます。しかし、この本を読んでもらえたら、そういった見方は本当に正しいのだろうか、と考えさせられます。

この本は、GDPの誕生、その後の発展、そして現在議論されている諸課題について、歴史的経緯を基に書かれています。経済のデジタル化、グローバル化が進む中で、経済社会構造が大きく変わろうとしています。そのため、現在国際連合を中心に新しいGDPについて議論が交わされています。GDPに興味・関心を寄せた方には、一読をお勧めします。

高山 和夫（国際経済学科）



著作権法と文化的・社会的価値創造の狭間に

『国破れて著作権法あり』

誰が Winny と日本の未来を葬ったのか』

城所岩生著（みらいパブリッシング）

大学生活では、著作権にかかわるルールを学び、著作物を引用または参照した学習・制作活動を行う機会は多くあります。

本書は、「Winny 事件」を題材に、日本の著作権法と文化的・技術的イノベーションの関係を深く掘り下げています。

2000 年代の日本で起きた「Winny 事件」は、P2P 技術を用いた革新的なソフトウェア「Winny」の開発者が逮捕されるという出来事で、インターネット上の文化的コンテンツの開発・活用に重大な影響を与えました。一方、アメリカでは YouTube をはじめとするコンテンツ配信サービスや様々な SNS など、インターネット上に文化的・社会的イノベーションを実現しています。本書は、この二国の著作権の捉え方とイノベーションの関係を比較し、解説しています。これらについて理解を深めてください。また、日本の文化産業の成長を目指す著者の情熱を、新入生の皆さんに感じてもらいたい 1 冊です。

田中 始男（メディア・映像学科）



厳しい社会での人の生き方に繋がる、この一生懸命さ。

『昆虫学者はやめられない』

小松貴 著（新潮文庫）

本書は、幼いころから生物好きで、自称「在野の研究者」であり、昆虫学者を「生き方」と評する昆虫業界の“奇人”小松氏による、昆虫学（生物学？）の入門書であり、著者が今までに研究した様々な昆虫、野の生物の生態について軽妙に描かれています。

好蟻性生物（アリの巣に居候する様々な生きもの）であるアリヅカコオロギ（エサの横取りや、アリの卵を食べる、百害しかない最悪の居候）の生態を地に這いつくばり観察・研究し、それにより判明した、アリヅカコオロギなりの生き抜いていくための苦勞。（昆虫ではないが）クモの命がけの婚活「婚姻贈呈」と、その雌雄による生態の違いや、子どもの成長までを「神聖で巧妙かつ愛おしい」「民家のすぐ近くの林で、ひそやかに行われている生と性のドラマ」であると表現するなど、著者の生きものたちへの愛と敬意、学者業への熱意と苦悩が伝わる内容となっています。

身近な生き物の生態を学ぶことができる読みやすい一冊です。新入生の皆さんも、著者のように「好きな事をずっと好きでいられる人生」を送れるように、本学で学び、過ごして頂ければと思います。

寺尾 信吾（職員）



オートファジーを丁寧に解説し、
ノーベル賞受賞の大隅良典さんとの思い出を回想した本

『生命を守るしくみ オートファジー
老化、寿命、病気を左右する精巧なメカニズム』
吉森保著（ブルーボックス）

これは、オートファジーを研究してきた著者がオートファジーを詳しく解説し、2016年にノーベル生理学・医学賞を受賞した大隅良典さんとの思い出を綴った本です。著者がドイツ留学から帰国して日本で職探しをしている時、あまり親密ではなかった大隅さんから新しい研究室を設立するための仕事のオファーが夜遅くの電話で届いたという逸話は興味深いです。

大隅さんは私の叔父なので、この本は大変身近に感じました。私がアメリカの大学院への応募書類を作成する必要があった時、近所にいた叔父・叔母がタイプライターを貸してくれました。叔母は私の母の妹にあたります。私が修士論文と格闘していた1988年は大隅さんにとっては飛躍の年になりました。独立した研究室を持つ助教授になり、酵母についての大発見がオートファジー研究を加速させました。マイナーだったオートファジーの研究を継続して成果をあげた大隅さんと著者の関わりは参考になりました。

早川 達二（国際経済学科）



社会科学的見地から見るプロ野球

『プロ野球「熱狂」のメカニズム

ファン行動とマネジメントの計算社会科学』

水野誠，稲水伸行，笹原和俊編（東京大学出版会）

去年は、WBC での世界一に始まり、NPB では関西の某球団の日本シリーズ制覇、MLB では大谷翔平選手の巨額移籍と、プロ野球界はファンにとっては眠っている暇もありませんでした。

本書は、その書名の通り日本のプロ野球における「熱狂」現象を様々な手法から解析したものです。「ファン行動とマネジメントの計算社会科学」と副題にあるように、ソーシャルメディアのデータなどを詳細に分析し考察しています。一方、球団ごとのファンの性格分析など、単に面白く接するパートもあります。また、選手の採用戦略・チームの競技力・ファンの消費活動など、多様な視点から洞察されており、スポーツマネジメントに興味のある方はもとより、スポーツ観戦をエンターテイメントとして楽しむ方にも興味深い一冊だと思います。

今年も、本書を片手に、「アレ」二連覇を楽しみにしたいと思います。

原口 博行（生物工学科）



読書のみは無意味?! アウトプットの薦め

『学びを結果に変えるアウトプット大全』

樺沢紫苑著 (サンクチュアリ出版)

学びはインプットとアウトプットの両輪で成り立ちます。読書、教科書の暗記、授業の聞き取り、試験準備は、新入生の皆さんが行ってきた一般的な学習方法だと思いますが、これだけでは不十分です。大学とそれ以降の学びは、得た情報をどう使うかがカギです。次の4年間は、ただ受け入れるだけの学びから脱却する時期です。

知識の蓄積を超え、それを実際に活用してみてください。『学びを結果に変えるアウトプット大全』は、そのための手引きです。学んだことを実生活で活かし、自己変革し、新しい挑戦を始めてみてください。知識は使われなければ色あせます。知識を行動へと変え、学びを進化させてみてください。

世界を見渡せば、知識が豊富でもアウトプットがなければ一人前とは見なされない社会が多くあります。この本は、知識を実践に移すための指針となり得ます。それにより、知識を生かし、実際の成果を生み出すための学習方法を学ぶことができると思います。

松本 陵磨 (大学教育センター)



歴史をながめる際の「先入観」にご注意！

『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか？』

小野寺拓也， 田野大輔 著（岩波ブックレット）

歴史学のなかで、わが国で最も人気のあるテーマの一つはナチス（ヒトラー）だろう。この点は、多くの関連書籍の刊行やドキュメンタリーの放映からもわかる。但し、それらの情報に学術的な裏付けがあるのか否かについては、慎重な態度が求められる。

一例をあげてみよう。アウトバーンの建設をはじめとする失業者対策は、歴史教科書にも記載されるように、ナチス政権の「成果」に数えられている。しかしこの見方は、アウトバーンが失業者の解消に役立たなかった事実をふまえたものではない。私たちは、ナチスによって制作された映像プロパガンダの「罨」にはまることで、ナチス政権における失業者対策の欠如を見逃しているのではないだろうか。

私たちは、歴史を眺める際に根拠なき「印象」や「先入観」を抱きがちである。その危険をナチスという切り口から教えてくれるのが本書である。ぜひ一読をお勧めしたい。

村上 亮（人間文化学科）



社会と建築の間から、
私たちのこの先の未来をどう読むか

『閉ざされる建築、開かれる空間 社会と建築の変容』
中川 理 著（鹿島出版会）

大学に入学したばかりの皆さんに本書を薦めたいと思います。理由は3つあります。

第1に、読売新聞の「建築季評」というコラムをもとにした短編集であることです。1編は3～4頁と短く、スキマ時間に読めるので、通学のお供にもってこいですよ。

第2に、皆さんの時代の話であることです。新聞連載は2000年3月から2021年3月まで。これは皆さんの生きてきた時代と重なりますよね。自身の歩みを振り返りつつ読み進めれば、新しい発見があるに違いありません。

第3に、社会を見る目を養えることです。本書は、副題に「社会と建築の変容」とあるように、社会、建築、そしてその関係の変化を読み解くヒントが詰まっています。それはまた、建築を専門とする人々だけに閉じるのではなく、空間を分かち合い社会を構成する私たちにとってこそ、この先をどう読むかという未来の創造につながるのではないのでしょうか。

山本 一貴（建築学科）



タネから楽しく人生を学べるか。

『スイカのタネはなぜ散らばっているのか
タネたちのすごい戦略』
稲垣栄洋著（草思社）

植物は、動くことができない。どうやって新たな土地に子孫を繁栄させるのでしょうか。なんと、タネを作りとても巧みな戦略で子孫を運んでいます。あるものは動物にくっつき、またあるものは時速 200km でぶっ飛び、さらに自らプロペラで回転移動するものもいます。その戦略はあまりに見事で、私たちの人生のいにしえからの学びの教本ともなっています。

本書には「ああ、そうだったのか」と唸るようなタネからの教えが詰まっています。タネの戦略からいくつかの諺も作られています。子供の頃「ひつつきもち」と呼んで投げ合って遊んだものは実はオナモミです。「先んずれば人を制す」「急いては事を仕損じる」という 2 つの逆説的諺の真意はオナモミの実の中のタネにあるのです。塗り絵にしたいような素敵なイラストも各項目全てにあり、読みながら興味は倍増します。

さて、ではなぜスイカのタネはあんなに散らばっているのでしょうか。

井上 敦子（薬学部）



AI時代に過去の未来社会予測を振り返ってみよう

『ロボットの時代 [決定版]』 アイザック・アシモフ 著 (ハヤカワ文庫)

サイエンスフィクションの巨匠、アイザック・アシモフによる空想科学小説の短編集です。発表されたのは1950年代ですが、高性能ロボットが社会の隅々に入り込み、人間の代わりに様々な仕事に従事した場合に発生する問題を予測した物語が描かれています。決定版として再編集された本書は、幕間に著者による解説があり、各小説の時代背景が伺えます。蛙の足の電流実験が、フランケンシュタインの怪物の物語を生み出したように、科学技術の発展は人類の脅威を生み出すという「メフィストフェレス的創造」の恐れにアシモフは反旗を翻します。

ChatGPTや生成AIが社会に出始めた現在、劇中にあるように「人間の生命がロボットの生命より軽んぜられる時点に到達」する危惧が人々の心の片隅に懸念としてあるようです。直接の危険はともかく、AI失業問題にロボット工学三原則が有効なのか、考える契機にもなる一冊です。

伍賀 正典 (スマートシステム学科)



「生命とはなにか」の命題に迫る

『生物と無生物のあいだ』
福岡伸一 著（講談社現代新書）

本書では、生物学的研究のこれまでの歴史をたどりながら「生命とは何か」という大きな問いに対し、生物学者達がどのように問いをたて、答えを出そうとしたのかその足跡を追体験できます。また、その先に著者がたどり着いた「生命とは代謝の持続的変化である」という考えは、個人の将来や大学、サークルなどの組織論などあらゆるものに応用可能で、新しい視点をもたらしてくれます。

生命の仕組みを知りたい、生物学に興味のある方にもおすすめの本です。

佐藤 雄己（薬学部）



脳にとって「良い習慣」と「悪い習慣」

『脳に悪い7つの習慣』

林成之著（幻冬舎）

脳にとって「良い習慣」、「悪い習慣」って今までに考えた事がありますか？

この本の著者は脳神経外科が専門の医師です。文中には脳の部位、それぞれの役割なども書かれています。生まれた時からの付き合いなのに見た事も無く、「脳」の仕組みについて考えた事なく生活をしていたので少し知りたいと思い読んでみました。

脳の本能は「生きたい」・「知りたい」・「仲間になりたい」。脳が本来求めている生き方、それは「違いを認めて、共に生きること」。そのために脳に悪い7つの習慣を挙げてある本なのです。

7つの習慣の中に、えっ！これはイケないの？と、思う習慣もいくつか有ったのですが、読んでいくうちに、そうなのかと納得したのです。ただ、この本は一度読んで終わりではなく、繰り返し読むことで脳にとって良い習慣が出来るそうです。

この本は脳が本来求めている生き方のための人との付き合い方の参考にもなる、一冊ではないでしょうか。

高橋 佳美（職員）



日頃感じている睡眠の疑問解決できます

『やってはいけない眠り方』

三島和夫著（青春新書 PLAY BOOKS）

皆さんは毎晩ちゃんと睡眠をとれていますか？「なかなか寝付けない」「寝起きが悪い」など問題を感じてはいないでしょうか？

質の良い睡眠がとれていなければ、日中に眠気やだるさを感じるだけでなく、生活習慣病や癌、うつ病、認知症など深刻な病気のリスクを高めてしまいます。

理想の睡眠時間は 8 時間だとよく耳にしますが、本当にそうなのでしょうか。快眠を得るには一体どうしたら良いのでしょうか。

本書はこのような私たちが日頃感じている睡眠の疑問を 2 択クイズ形式で学ぶことができます。読み進めていくと、今まで思っていた睡眠の常識が実は違っていたのだと気づかされることもあるかもしれません。

皆さんも正しい睡眠方法を知って、睡眠を改善し、充実した大学生活を送ってください。

牧 香苗（職員）



動脈硬化の予防に用いられるスタチン。
その発見と承認までの道のりを発見者自らが語る。

『新薬スタチンの発見 コレステロールに挑む』
遠藤章著（岩波書店）

本書は、これから自然科学を学び、科学者や医薬品開発に興味をもっている学生に読んで欲しい。コレステロールは生体のあらゆる組織にとって不可欠な原料となる一方で、血中のコレステロールが高すぎると動脈硬化を引き起こし、その進行により心疾患や脳血管疾患の原因となる。そのため、血中コレステロールを低下させる薬の開発が望まれていた。

本書では、フレミングによるペニシリン発見とその抗菌薬への応用に感化された日本人科学者が、青カビの培養液からスタチンを発見し、それをコレステロール低下薬として動脈硬化予防に用いるまで、いくつもの困難を乗り越えてきた道のりを描いている。本書が執筆された2005年において、スタチンは世界の医薬品売り上げの第1位（130億米ドル）の大型市場まで成長し、世界中で服用されている。この偉業の達成は、科学者の諦めない執念や強い好奇心が原動力となり、セレンディピティを惹き寄せたのかもしれない。

松岡 浩史（薬学部）



お茶とは何かから始まり、お茶の歴史と作り方や
お茶と健康の関係まで、お茶について詳しくなれる本

『お茶の科学』

「色・香り・味」を生み出す茶葉のひみつ』

大森正司 著（ブルーボックス）

この本は、普段私たちが飲んでいるお茶について、お茶にはどんなものがあるかということから、緑茶や紅茶はどのような歴史を持ち、どのように日本に伝わってきたのかという「お茶」を歴史的に解説しています。それと同時に緑茶・紅茶・ウーロン茶・黒茶の製造過程や、それに関連する内容をお茶ごとに解説しています。また、お茶の3大成分であるカテキン、テアニン、カフェインがどのような作用を持っているかということについて詳しく解説されており、自分もこの本を読むまでは、この成分にこんな作用があるとは知らなかったものもあり、とても勉強になりました。

この本は、お茶の知られざる部分を知ることができるので、是非一度ご覧ください。

森 祐斗（生物工学科2年）



味の言語化、できていますか？

**『豊かな人生を引き寄せる
「あ、これ美味しい！」の言い換え力』
福島宙輝 著（三オブックス）**

あなたは、美味しい食事を誰かと共有するとき、上手に感想を伝えることができていますか？味を表現する力、実は記憶が重要なんです。

本書では、チョコレートやお茶などを例に挙げ、味や食感を表現するための言語化能力を養う方法を紹介しています。味を言語化する方法だけではなく、舌のどこで味を感じているのか、味わい方の違いなど、“食べるということ”にも触れながら、食を楽しむための知識が詰め込まれた1冊です。

筆者のユーモアのある書き口と、グラフなどを用いて味を可視化することでわかりやすく“美味しい”の表現法について学びながら、味の表現を身に着けることができます。

“美味しい”を表現する言葉を身に着けることは、自身の味の好みを理解することにもつながります。あなたも「美味しい」の言い換え力を身に着けて、新たな食の好みを探してみませんか。

山野 佳那（職員）



眠れなくなるほど面白い！

『面白くて眠れなくなる脳科学』
毛内 拓 著 (PHP エディターズ・グループ)

さて新入生のみなさんいきなりですが質問です。脳は、「腕を曲げよう」と思い付いて、どのくらいで動き出すと思いますか？私は脳が情報を送って腕に伝わるまでの時間、と考えましたが私と同じように考えた人もいるのではないのでしょうか？答えは本書の裏側に書かれているので確認してみてください！

この本は、質問のように脳の奥深い仕組みや驚くべき機能についての情報が取り上げられ、面白くわかりやすく説明されています。また、単なる知識の羅列にとどまらず、日常生活において脳科学の理解がどれほど重要かを示しており、読者が自らの生活に取り入れやすく、理解が深まる一助となっております。

科学に興味を持つ方や自己啓発を求める方にとって非常に魅力的な一冊であり、同時に自分の脳に対する新しい理解を得られることでしょう。

吉津 悠子（職員）



苦悩の人生を生きたある男の手記

『人間失格』

太宰治 著（新潮文庫）

「恥の多い生涯を送って来ました。」という有名なフレーズから始まる太宰治の代表作。

主人公の葉蔵は、子供のころから人に心を開くことができず、本音を隠して生きてきました。そのまま大人になり他人に迷惑ばかりかけてきた自分のことを人間失格だとののしります。

このように暗い話が続く本作ですが、主人公の人間に対する鬱屈とした感情には思わず共感してしまう部分もあり「人間らしく生きるとは何か」「社会に溶け込んで生きるとは何か」ということについて深く考えさせられる作品でもあります。

昔の作品に挑戦したいけど何から読めば良いかわからないという方に、ぜひおすすめしたい作品です。

碓本 梢太（薬学部1年）



唯一無二のミステリー

『屍人荘の殺人』

今村昌弘 著（東京創元社）

私が取り上げた本は『屍人荘の殺人』である。この本のあらすじは大学のサークルの合宿の最中にウイルスによるバイオテロで感染しゾンビとなった者たちにより、紫湛荘に閉じ込められてしまう。そのうえゾンビに殺されたと思われる事件まで起こる、といった物語だ。

このバイオテロは浜坂智教という科学者が引き起こした事件で黒幕には班目機関という特異機関が関わっている。彼の発言のうちの1つに「この行く先を見届けたとしてもその意味を理解することはできないだろう」とある。

今作を読んだ方々とぜひ議論したいと思った点はこの発言の「意味」とは何だったのかだ。これは今作では明記されておらず答えを知ることはできないが可能性としては何があるのか気になった。自分的には浜坂智教は自身の研究成果や自分自身を周りに知らしめたかったのではないかと考えている。この作品はミステリー好きも唸るほどの伏線が張り巡らされている。読んでいて誰もが1度はミスリードするであろう作品だと思った。

大無田 康太（人間文化学科2年）



日常に潜む不思議な縁で結ばれ
重なり合う遠くて近い5人の人生

『ノウイトオール あなただけが知っている』
森バジル著（文藝春秋）

「この作品には推理・青春・科学・幻想・恋愛という5つのジャンルの短編作品が収録されている」、これだけ聞くと、単なるよくある短編集のように思うかもしれませんが。異なる日常を送る登場人物をつなぐ鍵は「切縞市」という町の存在ただ一つのみです。切縞市を舞台に少しずつ重なり合いながら展開されていく5つの物語、一つずつ読み進めていくごとに作者からの挑戦状に引きずりこまれていきます。

悩みや不安、葛藤は誰しもが一度は経験したことがあるもので、この作品の主人公達も皆何らかの問題を抱えています。そんな全く異なる人生を歩んできたはずの5人の物語が、点と点で結ばれて一つに繋がった瞬間、あなたは何を感じるのでしょうか。

一つ一つの短編作品としても楽しむことはできますが、最後まで読んだ人にしかわからない、日常に潜む不思議な縁がつなぐ物語集を読む、そんな未知なる読書体験をぜひ味わってみてください。

加藤 彩羽（人間文化学科2年）



いいロボットとは

『きまぐれロボット』

星新一 著（角川文庫）

いいロボットとはなんなのか。気まぐれなロボットを買った人間の生活を描いた超短編小説です。

ロボットを買った人間が身の回りの世話をさせていたところ、ある時ロボットが急に動かなくなります。大声で命令しても叩いてもダメでした。離れ島に住む彼は、ロボットを売った博士に問い合わせようにも船が 1 か月後しかありません。それまでロボットの暴走に困り果てながらも生活し、やっと都会に着いた彼は真っ先に博士の元へたずねます。そこで彼が言われた言葉とは。

星新一のショートショート作品の『きまぐれロボット』は、短い作品ながらもいいロボットとは何かということを考えさせてくれます。博士の言った言葉が心に残る作品です。

小池 綾香（人間文化学科 1 年）



小さな町工場が窮地を救う

『下町ロケット ゴースト』

池井戸潤 著（小学館）

この作品は、シリーズ第三作目である。佃製作所という小さな町工場は、ヤマタニと帝国重工との取引が打ち切られてしまうと、赤字に陥ってしまい、新たな事業をギアゴーストというベンチャー企業の社長の伊丹と副社長の島津の元帝国重工コンビと共に窮地を救ってもらう物語である。

会社の存続をかけ新たな事業として、農業に手を出した。トラクターに使用するバルブに目を付け、バルブを開発するが、ライバル社の大森バルブの方が性能は良いが、天才・島津は佃製作所のバルブを選び、新たなビジネスチャンスを掴んだ。ケーマシナリーというサスペンションメーカーからギアゴーストへ特許侵害を指摘され、15億円の損害賠償を要求されてしまう。ここから、佃製作所という小さな町工場が、チーム一丸となって難題に立ち向かう姿がかっこよく感じた。

この本を読むと、佃製作所が大きな挫折を味わっても、前に進もうとする男たちの不屈の闘志とプライドに胸を打たれ、勇気をもらえらると思う。ぜひ、一度読んでみてほしい。

児玉 侑斗（人間文化学科1年）



From Baker Street in London

『シャーロック・ホームズの冒険 [新訳版]』

アーサー・コナン・ドイル著，深町真理子訳

(創元推理文庫)

『シャーロック・ホームズの冒険』の中にはたくさん作品がある。その中で、私が面白いと感じたのは「ボヘミアの醜聞」と「まだらの紐」だ。作品を通して、怒涛の展開の中で垣間見える登場人物たちの人間性の魅力に引き込まれるだろう。

また、シャーロック・ホームズシリーズは英語の学習に役立つと思う。アーサー・コナン・ドイル本人が書いた原書は、難しい単語が多く使われているため全て理解するのは難しい。そのため日本語訳された本は手にとりやすいが、原書で使われている単語がそのまま直訳されず他の言葉を用いて訳されている箇所がある。それは訳した人の個性が出るため、作品をより楽しむことができる。そのためこの本だけでなく、他の出版社が日本語に訳した作品も読んで理解を深めるのも楽しみ方の一つであると思う。

是友 香澄 (経済学科 2年)



「あの人みたいに本を守りたい」

『図書館戦争』

有川浩 著（アスキー・メディアワークス）

これはメディア良化隊によって表現や読書の自由が制限される中で、図書館の自由・読書の自由を守るために奮闘する物語です。

主人公、笠原郁は高校生の時にどうしても買いたかった本が規制の対象になりました。郁は良化隊に「万引き犯になるぞ」と脅されますが、「万引き犯になってもいい」と本を放しません。そんな中、図書隊を名乗る青年によって助けられ、本を買うことができました。郁は助けてくれた青年に憧れ、図書隊へ入隊することを決意します。厳しい特訓の末、郁は最前線で良化隊員と戦う「図書特殊部隊」に女性初として抜擢されます。体力はあっても頭が悪い郁は同期に後れを取ってしまいますが、教官や同期に叱られ、励まされ、憧れの青年のような図書隊員になるため奮闘します。

私はこの本を読んで、本を守るために命懸けで戦う図書隊や、万引き犯にされてまで本を守ろうとした郁の姿に感動しました。皆さんも、本を守りたいという気持ちを誰より強く持っている笠原郁に憧れてみませんか？

西江 知菜（人間文化学科1年）



海賊の世界を少しのぞき見してみよう。

『村上海賊の娘』
和田竜 著（新潮社）

海賊というと、恐ろしいならず者のイメージが強い人は多いのではないだろうか。しかし、日本の海賊はほんの少し違う、あくまでほんの少しだが。少し、海賊の世界をのぞき見してくれ。きっと面白い。

村上家の姫である主人公。都会と戦に夢見る船乗りだ。とあることから、依頼を受けて門徒が載った船を本願寺まで運ぶことになった。しかし、大坂までくるとそこには厳しい戦国の現実。一度は打ちひしがれて家に帰るものの、織田軍に兵糧攻めにあった門徒のことを助けるため戦に出ようとする。だが、海の掟で女は軍船に乗れない。そして、門徒が落とされるのも時間の問題。追い詰められた主人公は、雑賀孫市と取引をし、彼と数十人と軍船へ奇襲をかけることに。そして、現状を知った村上一族と毛利の将が一か八か主人公を助ける為に分の悪い戦いに挑む。

しかし、行く手を阻むのは織田の将そして、伊勢志摩の海賊衆。圧倒的な物量差、主人公たちは苦戦を強いられる。幾度となく戦いを繰り広げ、主人公が強敵を倒したことで、一気に戦況が動く。主人公たちは勝利をおさめ、無事に目的の物資を本願寺まで届けることができた。

海賊の世界はいかがだったろうか。ここで紹介できたのはほんの一部。続きは是非本編を手にとってみてほしい。

野島 萌（人間文化学科1年）



就職活動×ミステリー

『六人の嘘つきな大学生』

浅倉秋成 著 (KADOKAWA)

就職活動×ミステリーが題材のお話です。

ある企業の最終面接で、直前に変更された選考方法とその選考中に起こった事件に惑わされる6人の大学生の就職活動中と、彼らの入社から数年後を描いた2部構成になっています。

登場人物の表と裏を見ることで、他人の本質を見抜くことは難しいと改めて感じました。

小説としても伏線が多く、誰が犯人なのか考察しながら読み進めることができ、展開が面白かったです。

大学生活をどのように過ごし、自分の進路や就職活動について考えるきっかけにもなる1冊だと思います。

原田 稀吏 (情報工学科4年)



古典文学の新しい楽しみ方

『ハイド』

ダニエル・ルヴィーン 著 (KADOKAWA)

皆様は、『ジキル博士とハイド氏』という小説をご存じですか。慣用句にもなっているくらい有名なタイトルなので、名前は知っているという方は多いのではないのでしょうか。私が今回おすすめする本は、原典といえる『ジキル博士とハイド氏』の物語を主軸に置きながら全く新しい視点で書かれている、いわば再解釈本です。

原典ではジキル博士やその友人の視点で物語が進んでいきますが、ハイドの主観は全く描写されません。そこに着目して書かれたのがこの作品です。話の半分近くがハイド視点で書かれていて、また口語調で書かれているので、ハイドの心情や行動がダイレクトに伝わってきます。そこがこの本の大きな魅力だと思います。この物語は最後の終わり方は原典と全く一緒ですが、語り手が違くと受ける印象がガラッと変わります。原典へのリスペクトも独自のオリジナル要素もたっぷり詰め込まれた面白いお話なので、ぜひ読んでみてください。

村上 りの (海洋生物科学科3年)



見落としには御用心

『きのうの影踏み』
辻村深月 著 (KADOKAWA)

ミサキとマヤの友人「なっちゃん」の存在があらゆる人たちの記憶から消えた。その理由を2人は都市伝説として信じられてきた「十円参り」のせいだと確信する。存在を消したい人物の名前を忘れず10日間紙に書き続けることが条件である十円参り。その犯人は一体誰なのか…十円参りを行う神社の賽銭箱、そして「なっちゃん」と共に3人でよく遊んだ団地の集会所とあらゆる場所を探すも手掛かりは見つからなかった。その結果、最終手段としてミサキとマヤが選んだのは「なっちゃん」の名前が書かれた紙が入っているであろう賽銭箱を壊すこと。10日間忘れず書かれた紙は名前の部分が血で書かれたように赤く染まるという言い伝えがあった。

2人が賽銭箱の中から見つけ出した紙に書かれた「なっちゃん」の名前は本当に10枚あるのか。そして誰が何の目的で「なっちゃん」という存在を消そうとしたのか。はたまた「なっちゃん」という存在は本当にみんなの記憶から消えているのか。短い話でありながら最後の最後まで展開の読めないミステリー。きっと貴方も結末にゾッとする。

吉梅 彩音 (人間文化学科1年)



「生きてる」と「生きてく」、その間にあったもの

『護られなかった者たちへ』

中山七里 著（宝島社文庫）

議員や市役所職員が残虐な形で殺害をされる所から、物語はスタートする。殺された人間に共通する事は、真面目で誰からも恨まれるような事をする人間では無いと誰もが語る人物像であることだった。その犯人は、両者の事を確かに恨んでいた。この物語は、犯人を追う刑事と犯人の物語が同時並行で進んでいく。被害者と犯人には共通点があった。それは「生活保護」である。

この本は、低予算かつ不正受給が許されない市役所側と明日を生きるのも困難な程に生きるのが難しい受給希望者の両者がリアルに描写され、両者の正義が衝突を描かれている。その正義がぶつかり合い、なぜ被疑者が残虐に殺されたのか。なぜ犯人はそこまで強い憎悪を抱いて、殺してしまったのか。その謎を読み解いて欲しい。「単なる役所への怨恨で殺した」。そんな単純な言葉で語れない可憐で儂い物語を読み解いて欲しい。最後の逆転劇や人の生き様とタイトルの意味が分かるときっと涙を流すだろう。

四茂野 尚也（人間文化学科 1年）



少し古いですが今に通じる人の成長・家族のお話

『稚くて愛を知らず』
石川達三 著（角川文庫）

この本が書かれたのは昭和 40 年代で、著者は社会派小説を数多く出版した石川達三氏です。恋愛や結婚、夫婦などをテーマにした作品を多く執筆しています。この小説は 10 代後半に読みましたが、印象に残っていたのでお勧めします。

作品は、しっかり愛情を受け育ったはずの女性が主人公でその女性の人生を通して家族からの愛情、自己愛、そして他者への愛情など、人としての出会いと別れを経験します。愛情のない結婚生活においても子供はできるし、主人公のように子供の養育に愛情を持たない母親でも、あるところまでは子供は育っていきます。恋愛や結婚や夫婦は、形式上からいっても実質上でも、相対的には存在すると思われ、平凡な結論ですが、男女双方の努力が必要なのです。

幸福は、自ら獲得し創造するよりほかに、実現できる方法は無いものであることを静かに教えているのではと考えます。

石井 香代子（生命栄養科学科）



ホームスパンとひつじ

『雲を紡ぐ』

伊吹有喜 著（文春文庫）

これはホームスパンを巡る物語。内気で思っていることを言葉にできない主人公の美緒は、両親の拗れた関係から逃れるために青森にある父方の祖父の家へ家出をする。そして羊毛を染め、紡いで織る工房を営む祖父と裕子、太一に出会う。祖父の工房は今まで美緒がずっと大事に持っていた赤いショールを作った工房だった。そうして美緒はいつしか自分で染めてみたいと思うようになり弟子入りをし、ホームスパンの技術を教えてもらう。しかし母はホームスパンを学び自分を少しずつ理解してきた美緒に、一方的に将来のことや美緒の態度について責め立て学校に連れ戻そうとする。祖父も交え父と母に自分がやりたい事、学校をどうするか話し合い、少しずつ関係を修復していく。

そんな中で私が1番感動したのは、美緒が初めて織った花瓶敷きが母親によって額縁にいれられ飾られていた時だ。理由は、お互いよく話し合い、手探りでも進んでいくことを決意した母親の美緒への愛情が感じられたからだ。優しく、それでいて強く書き上げられた物語だった。

大沢 凜（人間文化学科1年）



「作家で詩人で画家で、エルロンドが合わさった人」

『J・R・R・トールキン

自筆画とともにたどるその生涯と作品』

キャサリン・マキルウェイン著, 山本史郎 訳 (原書房)

現代ファンタジーの基盤となった『指輪物語』『ホビット』などの作者であるJ・R・R・トールキン。言語学に秀で、幼いころから独自の言語体系を創作していたトールキンは、作品(物語)を作る際に舞台となる土地の地図を描いており、物語に登場する種族の言語や文字、歴史、神話体系まで作り込んでいました。

徹底して創作するトールキンだからこそ、愛する家族へも心からの奉仕を行っています。毎年、息子たちへのクリスマスカードには、サンタクロースと助手の白くまの物語とイラスト、サンタクロースからの手紙を書いて送っていたようです。

標題にあるエルロンドとは、『指輪物語』等に登場するエルフのことで、標題の一文はトールキンがリーズ大学に勤めていた頃の学生が、彼を評した言葉です。

学生時代の思い出や勉強(キス)帳簿、友人であるC・S・ルイスとのやり取り、作品の執筆メモ、数々のスケッチ、それらから見える家族への愛情…。彼の生涯を追体験し、その人となりにより少しだけ温かな気持ちになれる、そんな一冊です。

喜多村 侑佳 (職員)



あなたがいま何かを選んだ時、速い思考（ファスト）と遅い思考（スロー）のどちらを使っていましたか？

『ファスト&スロー

あなたの意思はどのように決まるか？』

ダニエル・カーネマン著（ハヤカワ文庫）

心理学の知見を経済学に統合してノーベル経済学賞を受賞した著者が人間の意思決定について説明しています。意思決定において、コストパフォーマンスや割に合わないといった言葉が使われていて、ある種の損得勘定が働いているのは想像できるでしょう。

では人間は損得勘定が上手なのでしょうか。あまり上手ではありません。本書のタイトルにあるように、人間は速い思考と遅い思考という2つの思考を組み合わせで使い、使うのが簡単な速い思考は、問題に答えが出せるように都合よく問題を改変するため、答えは速く出ますがよく間違えるのです。

ここで問題です。答えとして瞬時に浮かんだ数字は何でしょうか。「おもちゃのバットとボールが1つずつあります。合わせて110円です。バットはボールより100円高いです。ボールはいくらでしょうか。」時間をかけ遅い思考で連立方程式を解けば正解に辿りつきますが、自分の中にある速い思考を感じる事ができたでしょうか。

助田 暁（経済学科）



その悩みにお応えします！！

『自省録』

マルクス・アウレーリウス 著（岩波文庫）

著者は2世紀のローマ皇帝であったマルクス・アウレーリウス。アジア・中東・ヨーロッパを領土し絶大な権力を持っていたローマ帝国のその頂点にある統治者としての皇帝が、日々生活の中でのある種の備忘録的に書き記したものが、写本となり、さらにその写本から16世紀にギリシャ語の出版物としてまとめられたのが本書の原典です。こう書き記すと何か難解な書物のように思えますが、実際に手に取ってその頁をめくってゆくと、思わずその言葉にうなずいている自分自身に多分出会うと思います。ぱらぱらと頁をめくると、「君は」という問い掛けに思わず耳を傾けるように、軽い気持ちでその文章を読んでしまうのではないのでしょうか？

精神科医であり、数多くの著作がある神谷美恵子が育児をしつつ翻訳したその文体も、読みやすさの一因かもしれません。何かに迷ったり、悩んだりした時の常備薬としてもお勧めです。

中島 学（心理学科）

推薦図書リスト

- 『頭のいい人が話す前に考えていること』 安達裕哉 (ダ'イモント'社,2023年)
- 『あなたは、うで体?あし体?:3秒で体がわかる、人生が変わる』 鴻江寿治 (集英社,2018年)
- 『アンネの日記』 アンネ・フランク (文藝春秋,2003年)
- 『いちばんやさしい美術鑑賞』 青い日記帳 (筑摩書房,2018年)
- 『いつか必ず死ぬのになぜ君は生きるのか』 立花隆 (SBクリエイティブ,2022年)
- 『江戸っ子の食養生』 車浮代 (ワニブックス,2022年)
- 『稚くて愛を知らず』 石川達三 (KADOKAWA,1967年)
- 『お茶の科学:「色・香り・味」を生み出す茶葉のひみつ』 大森正司 (講談社,2017年)
- 『面白くて眠れなくなる脳科学』 毛内拓 (PHPエディターズ・グループ,2022年)
- 『きのうの影踏み』 辻村深月 (KADOKAWA,2015年)
- 『きまぐれポット』 星新一 (KADOKAWA,2006年)
- 『ぎりぎり合格への論文マニュアル』 山内志朗 (平凡社,2021年)
- 『国破れて著作権あり:誰がWinnyと日本の未来を葬ったのか』 城所岩生 (みらいパブリッシング,2023年)
- 『雲を紡ぐ』 伊吹有喜 (文藝春秋,2020年)
- 『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?』 小野寺拓也,田野大輔 (岩波書店,2023年)
- 『原色牧野植物大図鑑』 牧野富太郎 (北隆館,1986年)
- 『昆虫学者はやめられない』 小松貴 (新潮社,2018年)
- 『GDP: <小さくて大きな数字>の歴史』 ダ'イソ・コイル (みすず書房,2015年)
- 『J・J・R・トルキン: 自筆画とともにたどるその生涯と作品』 キャサリン・マキルウェイン (原書房,2023年)

『思考の整理学』 外山滋比古（筑摩書房,1986年）

『史上最悪の破局を迎えた13の恋の物語』 ジェニファー・ライト（原書房,2018年）

『自省録』 マルクス・アウレリウス（岩波書店,2007年）

『屍人荘の殺人』 今村昌弘（東京創元社,2017年）

『下町ロケット：ゴースト』 池井戸潤（小学館,2018年）

『シャーロック・ホームズの冒険』 新訳版 アーサー・コナン・ドイル（東京創元社,2010年）

『新薬スタチンの発見：コレステロールに挑む』 遠藤章（岩波書店,2006年）

『スバのタネはなぜ散らばっているのか：タネたちのすごい戦略』 稲垣栄洋（草思社,2017年）

『青春を山に賭けて』 植村直己（文藝春秋,2008年）

『生物と無生物のあいだ』 福岡伸一（講談社,2007年）

『生命を守るしくみ オートファジー：老化、寿命、病気を左右する精巧なメカニズム』 吉森保（講談社,2022年）

『天災と国防』 寺田寅彦（講談社,2011年）

『閉ざされる建築、開かれる空間：社会と建築の変容』 中川理（鹿島出版会,2022年）

『図書館戦争』 有川浩（メディアワークス,2006年）

『人間失格』 太宰治（新潮社,2006年）

『「和型」人間の時代』 太田肇（平凡社,2018年）

『ワットオール：あなただけが知っている』 森バジル（文芸春秋,2023年）

『脳に悪い7つの習慣』 林 成之（幻冬舎,2009年）

『ハイト』 ダニエル・ルグーイーン（KADOKAWA,2017年）

『美術の物語』 エルンスト・H・ゴンブリッチ（河出書房,2007年）

『ファスト&スロー：あなたの意思はどのように決まるか？』 ダニエル・カーネマン（早川書房,2014年）

『プロ野球〈熱狂〉のメカニズム：ファン行動とマネージメントの計算社会科学』 水野誠,稲水伸行,笹原和俊（東京大学出版会,2021年）

『頁をめくる音で息をする』 藤井基二（本の雑誌社,2021年）

『本田宗一郎：やってみもせんで、何がわかる』 伊丹敬之

（ミネルヴァ書房,2010年）

『学びを結果に変えるアウトプット大全』 樺沢紫苑（サンクチュアリ出版,2018年）

『村上海賊の娘』 和田竜（新潮社,2013年）

『護られなかった者たちへ』 中山七里（宝島社,2021年）

『「役に立たない」研究の未来』 初田哲男,大隅良典,隠岐さや香（柏書房,2021年）

『やってはいけない眠り方』 三島和夫（青春出版社,2017年）

『豊かな人生を引き寄せる「あ、これ美味しい！」の言い換え力』 福島宙輝

（三才ブックス,2018年）

『六人の嘘つきな大学生』 浅倉秋成（KADOKAWA,2021年）

『ポットの時代』 決定版 アイブック・アソシエ（早川書房,1984年）

新入生にすすめる 50 冊の本 2024

2024 年 4 月 1 日発行

編集・発行

福山大学図書館運営委員会

〒729-0292

広島県福山市学園町 1 番地三蔵

福山大学附属図書館



福山大学

